

図書紹介

Victor Purcell. *The Memoirs of a Malayan Official*. London: Cassel & Co. Ltd., 1965. 373p.

Victor Purcell. *The Chinese in Southeast Asia*. Second Edition; London: Oxford University Press, 1965. xvi+640p.

Victor Purcell. *Malaysia*. London: Thames and Hudson, 1965. 224p.

ようやく春らしくなって、緑したたるばかりの1961年5月の終りごろ、ケンブリッジ大学を訪ね、Victor Purcell 博士に Trinity College の教官のクラブで、イギリス式の午後のお茶を御馳走になったことを、いま、つくづく、なつかしく思います。Purcell 博士は訪れたのは、臼井二尚・棚瀬襄爾両教授とともに、欧米における東南アジア研究状況を調査するためであった。臼井教授があらかじめ連絡しておかれたために、British Council がイギリスにおける東南アジア専門の leading scholars に面会できるよう、見事に手配をしてくれた。そのうちの1人、Purcell 博士は温顔をたたえて、これまでの自分のマラヤでの経験や、現在の仕事を話して下さった。しかし、そのころ、モリモリ著作に没頭しておられたのだが、そういう気配はぜんぜんうかがわれなかった。むしろ、植民地官吏を引退して、母校で悠々と余生を楽しまれているという感じだった。それから4年たらず、博士の逝去を知った。しかも、逝去後ここに紹介する3冊の著書がつぎつぎとあらわれた。つつしんで哀悼の意を表するとともに、遺著3冊を紹介したい。

Purcell 博士の生涯は、*The Memoirs of a Malayan Official* に詳しい。これは、ほんとうに面白い本だ。1896年に生まれ、Bancroft's School を卒業するやいなや、18才で新任少尉の軍装で、生まれてはじめて1等車にのり、Green Howards 連隊に赴任するところからはじまる。フランス戦線の Ypres から Saille-Saillisel への激戦、さらに Chemin des Dames の苦戦、この間2度負傷し、さいごに俘虜となる。平和恢

復とともにケンブリッジの Trinity College に入る。

1921年に Malayan Civil Service に合格して、Kuala Lumpur に到着する。ここで、かれは躊躇なく中国語の専攻を決定した。このあたりの1節は人生の運命の不可思議を思わせる。この若い官補が寄宿していた植民地高官に、その旨を告げる。そのときの対話はつぎのようだ。高官は、しばらく黙っていてから、真剣な口調で話しはじめた。

「パーセル、君は何をしたか知っているかね。」

「いいえ、まったくわかりません。」

「君は君の生涯を駄目にしてしまった。君は決して総督になれない。弁務官さえむずかしい。“専門家”になるにすぎないよ。」

「申しわけございません。でも、なんとしましても、中国語が習いたいのです。」

この対話のあと、広東さらに北京へ留学に派遣される。かくして華僑研究者としての Purcell 博士が生まれた。留学からマラヤに帰って、華僑担当官となる。一時はクリスマス群島に転勤するが、またマラヤにもどり、上級裁判所に勤務し、移民官を経験する。1946年12月の太平洋戦争のときはアメリカに出張中であつたが、大佐に昇進され、最後には情報局長官となる。

こうした植民地官吏として終始中国人問題にたずさわつたが、その間、華僑をはじめ中国史について、ひじょうな熱意をいだきつづけた。戦後再びマラヤに戻り、イギリス軍政下の華僑問題最高顧問となる。しかし55才の定年まで働くよりも学究生活を望んで1946年に、25カ年の Colonial Service から引退する。

自叙伝はここで終るが、そのあとで博士は1946年から1948年にかけて、国連のアジア極東地域顧問となる。1949年、はじめて待望の純学究生活に入り、ケンブリッジ大学の極東史の Lecturer となる。1963年に引退し、いよいよ著述に没頭され、遺作3冊のほか、1965年1月2日逝去のときには、3巻からなる中国革命史を執筆中であつた。

博士の著述は、ひじょうに多いが、ここに紹介する3冊のほか、代表的なものとして、

The Chinese in Malaya. 1948.

The Chinese in Southeast Asia. 1951. (ここに紹介する1冊の初版)

Malaya—Communist or Free? 1954.

China, Nations of the Modern World. 1962.

The Revolution in Southeast Asia. 1962.

A Background to the Boxer Uprising. 1962.

などがある。まことに、マラヤ華僑問題を中心としての膨大な研究業績を残されたのである。自叙伝は、1946年 Malayan Civil Service 退官後の続巻を書くことを約束されていたが、これはとうとう執筆されないうままに終わった。Purcell 博士が代表的な1人であるが、イギリスは植民地当時、植民地官吏であるとともに、専門的な業績をあげた多くの学者をもった。おどろくべきことであり、また羨しいかぎりである。

「東南アジアにおける華僑」は、Purcell 博士の著書であるといつてよい。初版が1951年に刊行されたが、その後10数年の変化発展を補足修正された第2版は、現在、われわれがもちうる東南アジア華僑研究の最もまとまった、スタンダードなものである。

この大著は博士が一生をかけたものといつてよい。第1編は総論であって、東南アジアにおける華僑の分布・中国の初期の東南アジアへの接触・南洋への大量移住・華僑社会の特質をとりあげる。第2編以下は、国別の華僑の歴史的発展にかんする研究であって、ビルマ、タイ、ベトナム、カンボジア、ラオス、マラヤとシンガポール、英領ボルネオ、インドネシアおよびフィリピンにわかれる。Skinner 教授の有名な華僑研究とはちがって、本書はけっして分析的でもなければ、社会科学的方法が駆使されたものでもない。しかし、できるかぎり忠実に歴史的事実をとりまとめ明らかにしようとしたものである。この意味において、東南アジア華僑史としては、これにまさるものがない。しかも、判断は公正だ。さすがに、たんに文献によっただけでなく、1/4世紀にわたっての現地での華僑との体験をとおしての著作だけに、まことに妥当な解釈や説明にうたれる。東南アジアにおける華僑の占める重要性からして、広く東南アジアの問題に興味をもつ人に、基礎的な文献として強く推賞する。

同じく遺著 *Malaysia* は、博士の Malaysia の体験と研究との総合大成である。さきの東南アジア華僑研究とは異なって、New Nations and Peoples 双書の1

巻であるため、できるだけ、わかりやすくまた簡潔なマレーシアの紹介を本書は目的としている。まさに、一気に書きおろされたとの感じが強い。できるだけ事実に忠実であろうとするだけに、1965年いよいよ激烈となったインドネシアとの対決までとりあげられているが、1965年8月のマレーシアからのシンガポールにまでフォローされていないのは残念だ。

本書のあらましを紹介しよう。まず18世紀までのマラヤの歴史からはじまる。ついで、マラヤの民族、19世紀のイギリスの進出、英領統治、戦後のマラヤの独立への過程、マラヤ独立、サラワクとサバ、マレーシアの結成という順序で、マラヤの歴史的形成をとおり、この国の政治・経済・民族・文化などを明らかにしてゆく。博士が歴史学者であるだけに、歴史的発展過程からマレーシアがあきらかにされている。とくに、戦後のマレーシアの歴史に重点がおかれ、ゲリラ運動に詳しい。これは華僑によったものだけに、博士の特別の関心をひいたものであろう。

マレーシアの現状を知るには、その発展過程を明らかにする必要がある。そのために、本書は最もすぐれた文献であるといえよう。

いまこの遺著3冊を紹介するにあたり、Purcell 博士の偉大な業績をあらためて讃えたい。この博士を失ったことに、心から哀惜の念をおぼえる。(本岡 武)

Louis Barron (ed.) *Asia & Australasia*. in the Series of Moshe Y. Sachs (ed. & pub.) *Worldmark Encyclopedia of the Nations*. New York: Worldmark Press, Inc., Harper & Row, 1965. viii + 392p.

このたび新訂版(第3版)が出た、全5巻よりなる *Worldmark Encyclopedia of the Nations* のうちの1巻である。このシリーズは、世界中の国々の一つ一つについて、歴史、政治、経済、社会その他、国家の諸局面について、専門の学者に簡潔に解説させたものである。対象とする国々は、たんに独立主権国家だけに限られないで、たとえば、Maldiv Islands, Persian Gulf Shaykhdoms などまで含んでいる。

一つ一つの国家について、50の項目が語られている。その項目を例示すると、

1 Location, Size and Extent, 2 Topography,

6 Ethnic Group, 7 Language, 8 Religion, 9 Transportation, 10 Communication, 22 Agriculture, 23 Animal Husbandry, 24 Fishing, 38 Foreign Investments, 39 Economic Policy, 40 Health, 46 Press, 47 Tourism, 48 Famous Persons, 49 Dependencies

本書は、中近東から大洋州にかけての広い地域を扱うが、東南アジアの国々は、もちろん洩れなく収められている。東南アジアを担当するのは、政治学者の Richard Butwell, Army Vandenbosch, Bernard D. Fall などのほか、地理学者の Frederick L. Wernstedt も加わっている。

本シリーズの特色は、それがよかれあしかれ、現代世界の諸国家についての百科辞典である点に求められよう。世界中のあらゆる国家についての基本的な素描がいながらにして得られる点で、比較政治学を志すものにとっては願ってもないガイドブックになる。たとえば、ビルマについては、一級の専門家の Butwell が、A 4 版の紙幅を10頁も使って、前掲の50項目について、要領よくまとめている。記述は正確である。各国別に掲載されている地図を見ても、地名の表記法はきわめて正確である。とりわけ感心するのは、各国の解説の最後に掲げられている Bibliography である。特定の国家についてこれから勉強しようとするときに、本書の Bibliography はまたとない手引きになってくれることだろう。ビルマについては42冊の文献が示されているが、その選択はまともである。

本シリーズの限界は、やはりすべての百科辞典がそうであるように、限られたスペースの中で、1人、2人の学者が、歴史から Flora and Fauna に至るまで触れねばならないということから生ずる。しかし、その点は、いわないことにしよう。なぜならば、本シリーズの趣旨は、そうした百科辞典的限界をあえて覚悟した上で、限られたスペースの中で、世界の国々のポートレートを正確かつ簡潔に描きあげるところにあるからだ。その限りでは、たいへん成功した試みであり、そこが本書の、地道ながらも高い評価を得てきている所以でもある。地域研究の入門的資料集の一つとして、その点の留保つきで、お勧めしておきたい。

(矢野 暢)

Robert E. Ward et al. *Studying Politics Abroad—Field Research in the Developing Areas*. Boston: Little, Brown and Company, 1964. viii+245p.

珍しい本である。Ward, Pye, Coleman, Weiner などの一級の政治学者が、新興地域研究にたずさわる政治学徒のために、フィールド・サーベイを行なう上での心掛けを、いろいろの角度から説いた本である。

参考までに全体の構成を掲げると、

.....

II. Lucian W. Pye, *The Developing Areas: Problems for Research*

III. Robert E. Ward, *The Research Environment*

IV. Robert E. Ward, *Common Problems in Field Research*

V. James C. Coleman, *Documentary Research*

VI. Myron Weiner, *Political Interviewing*

VII. Frank Bonilla, *Survey Techniques*

VIII. Herbert H. Hyman, *Research Design*

.....

各章を担当する学者が、みなフィールド・ワークの経験者であるだけに、かれらの記述は決して観念的議論に流れず、生きている。本書は、文化人類学の手引きではなく、あくまでも政治学徒向けのガイドブックとして編まれているために、たとえば、各国の首都にある大図書館での文献研究をかなり強調するなどの特色も出ている。その観点から、巻末に、新興諸国一つ一つについて、主要図書館の内容と水準、データとして使えるような主要現地新聞の性格などをリストアップした詳細な Appendix—Coleman の手になるものである—がつけられていて、これがたいへん参考になる。この Appendix のなかでは、さらに、1963年段階において、アメリカのどの大学が、アジア、アフリカ、中近東のどの国で総合的地域研究を行なっているかが、国別に記録されていて便利である。

本書は、そうした実利的なメリットのほかに、新興諸国政治の概論書としても立派につかえる内容をもっており、とりわけ、新興諸国政治研究の新しい方法論について、参考にすべき議論をたくさん盛り込んでいる。アメリカの新興地域学が、どういう方向に向かいつつあるかを占う上でも、たいへん便利な本である。

地域研究というものは、単に学問的な問題意識を鋭敏に磨きただけではつとまらないし、反面、フィールド・ワークの方法論だけ精緻に研究したとしても、うまくいくものではない。学問以前の問題、あるいは学問と次元をたがえた問題がまつわりついてくるところに難しさがあるといえる。本書が、そうした学問前の問題をあまねくカバーしきっているかという点、そうでもない。それにしても本書は、地域研究の広義における技術的問題点に真正面から取り組んだ本として、しかもあまり類のない試みをした本として、一読をお勧めしたい。本書の評価は、読者の現地研究体験の有無とその内容に応じて、どうしても主観的にならざるを得まい。その点を考慮して、本書の内容のよしあしの評価は、ここでは避けたい。(矢野 暢)

Jack Heller and Kenneth M. Kauffman.
Tax Incentives for Industry in Less Developed Countries. Harvard University, 1963.
xii+288p.

本書は Harvard Law School の International Program in Taxation に基づいて生れた成果の一つであって、それまでも同計画に関連して、低開発国における課税問題を扱ったものとして、報告書や論文・著書などが発表されている。主なものとして、*Conference on Agricultural Taxation and Economic Development (1954)*, E. R. Barlow と I. T. Wender の共著である *Foreign Investment and Taxation (1955)*, *National Tax Journal* の1957年12月号の J. Froomkin による論文, "Some Problems of Tax Policy in Latin America," H. P. Wald の *Taxation of Agricultural Land in Underdeveloped Economies (1959)*, S. Ross と J. B. Christensen の共著にかかわる *Tax Incentives for Industry in Mexico (1959)* などがあつた。本書はこれら従来の研究の上に立っていわゆるタックス・インセンティブの問題を論じているのである。著者の一人 Heller 氏は上記計画に関する教授研究員であり、もう一人の Kauffman 博士は Harvard University の経済学部の教授である。

本書は6章から成るが、第1章序論のみが両著者によって共同執筆され、残りの5章のうち第2章「タックス・インセンティブの法律の分析」および第3章

「タックス・インセンティブ立法の評価のパーспекティブ」が Heller 氏によって、残り3章が Kauffman 博士によって書かれたものである。後の3章はそれぞれ第4章「所得税免除」、第5章「インセンティブの利潤性に対する影響の評価手続」および第6章「加速減価償却と関連インセンティブ」によって構成されている。Heller 氏の担当した章はタックス・インセンティブに関する行政学ならびに法的なアプローチに基づき、Kauffman 博士の担当した章は主として経済学の立場から論じられている。

低開発国における産業助成のために税制を用いることは広く行なわれている現象である。そのための主要なやり方は租税の免除といわゆる加速減価償却の導入である。本書も主としてこの2つの方法に関して、これらが有効に働きうる諸条件ならびにこれらの与える諸効果、さらにその他の方法との比較、などについて詳細な分析を行なっている。その際現実に行なわれている立法例としては多く南米およびアフリカ諸国のそれが言及されており、東南アジアの例にふれることは少ない。このことは一面、東南アジア諸国についてのこの種の研究がほとんどなされていないことを物語るものであるが、もちろんこのことはわれわれが東南アジア諸国のタックス・インセンティブを研究する上においての本書のもつ意義をいささかも減ずるものではない。本書を読んで一番印象づけられたことを一つだけあげれば、もともとの私の興味のせいによるのかもしれないが、この種の税制の利用の成功にとって「しっかりした税務行政の確立」がいかに重要であるかということであった。(清永敬次)

Japan Tax Association. *Asian Taxation 1965.* 1966. 148p.

日本租税研究協会 (Japan Tax Association) というのは、米国の National Tax Association にならって戦後わが国において誕生した民間の税法・税制の研究団体である。この協会は大蔵省などの協力を得て、1963年4月8日から16日にわたってアジア諸国の局長クラスの出席を得て「アジア諸国の税制と税務行政に関する特別大会」を東京と大阪において開催した。この会議の成果は『アジア諸国の税制と税務行政に関する特別大会記録』(1963年, 227頁)として残されている(英文の報告書は, Japan Tax Association. *Pro-*

ceedings of the Special Meeting of Japan Tax Association on Tax System and Administration in Asian Countries. 1964, 269p.)。この協会は以後、上の会議に出席したアジア諸国の税務担当官と連絡をとりながらその協力を得て、毎年アジア諸国の税制に関する最新の情報を提供する計画をたてた。その最初のものが *Asian Taxation 1964* (1964, 157p.) であり、それに続いてこのたび表記の *Asian Taxation 1965* がだされたのである。1964年版は、カンボジア、中華民国、インド、インドネシア、韓国、日本、ラオス、マレーシア、フィリピン、タイおよびセイロンの11カ国を含んでいたが、1966年版ではラオスが抜けて10カ国となっている。なお、前記会議にはヴェトナム(南)代表も出席していた。

アジア諸国の税制については、すでに、アジア経済研究所の調査研究報告双書としてだされている『アジア諸国の租税制度Ⅰ～Ⅴ』がある(インド、セイロン、タイ、香港、オーストラリア、ニュージーランド、マラヤ、シンガポール、アラブ連合、ナイジェリヤ、リベリアおよびクエートの12カ国を含む)。この双書は極めて詳細な報告でありその価値の高いことはいうまでもないところであり、東南アジア諸国の税制の研究をなす場合に不可欠のものであるが、表記の *Asian Taxation* はその詳細さの点においては比較すべくもないけれども、双書に含まれていない国をも含むことにおいて、また、それが常に最新の情報を提供するものである点において、特色を有しているのである。それが英文のものであることもあろうが海外の研究所などからの注文が引続いてなされているのもひとつのことである。

Asian Taxation 1965 は、カンボジア、セイロン、中華民国、インド、インドネシア、韓国、日本、マレーシア、フィリピン、シンガポールおよびタイの11カ国を含み、それぞれの国について、われわれは、国および地方政府の歳入のなかにおいて税収が占める地位、国税と地方税の税種、各税種の過去3年にわたる税収額、個人所得税および法人所得税制度の概要、外国人および外国会社に対する課税制度、国内産業発展を促進するための税制上の特別措置、税務行政機構、その他相続税さらには各種間接税制度の概要など、を知ることができるのである。いずれについても要領のよい記述がなされている。(清永敬次)

Wira Wimoniti. *Historical Patterns of Tax Administration in Thailand*. Bangkok: Institute of Public Administration, Thammasat University, 1961. ix+184p.

著者は、タマサート大学において会計学を専攻した後、同大学の Institute of Public Administration において行政学を研究し、現在はタイの国家開発省 (Ministry of National Development) の国家経済開発委員会に勤務している、タイの新進若手官僚の一人である。当年35才。私がバンコック滞在中彼の話聞く機会を得たが、彼はタイの税務行政について忌憚のない意見を聞かせてくれた。彼は、本書についてその狙いの一つは、たとえばラマ5世の時代における予算制度の確立など新しい事実の発見にある、とっていた。この書物は著者が Institute of Public Administration における修士論文としてまとめたものであり、私には残念ながら本書の内容について適確な評価を下しうる能力をもちあわせていないが、タイの修士論文の水準を示す一つの資料を提供してくれるものとしても興味深いものがある。またタイの税務行政の歴史について英文で書かれたものとしてはおそらく数少ない文献の一つではないかと思われ、その点だけにおいても本書は貴重であろう。

本書の内容は次の通りである。

第1章「序論」——研究の目的、範囲および方法、歴史的背景、租税という語の歴史上の意義、脚注法

第2章「旧税制」——スコタイ時代、初期アユタヤ時代、後期アユタヤ時代

第3章「初期バンコック時代」——租税停滞期、租税多様化期

第4章「初期バンコック時代(続き)」——ラマ4世時代の特別税の発展とその地位、租税政策、租税機関、徴税請負制度、Bowring 条約

第5章「チュラロンコン王の税務行政の改革」——財政改革前の状態、第1次改革、大蔵省の組織改革、租税徴収機関、徴取請負制度の廃止への動き、チュラロンコン王時代の租税状態

第6章「結語」——その後の発展、重要な発見、過去の評価

附録——歴代国王の統治期間、Three Seals Law, Barcalon と歳入、Bowring 条約、文献リスト

本書は、主としてラマ5世の時代までを取扱い、上のような時代区分に従って、それぞれの時代の租税の形態、税収額、税務行政の仕組み、租税政策などを取上げて記述しているのである。(清永敬次)

The Dynastic Chronicles, Bangkok Era, the Fourth Reign, B. E. 2394~2411 (A. D. 1851~1868). Translated by Chadin (Kanjavanit) Flood. Volume One: Text. Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies, 1965. xvi+267p.

まことに不思議なことなのだが、タイ国史研究の現状を見ると、史料のきわめて限られているスコータイ史や、アユタヤ史の研究より、かえって史料の豊富なラタナコーシン史、とくに1932年の立憲革命以前の歴史研究の方が手薄である。この点 W. Vella の「ラーマ3世史」などは、この方面でのパイオニアワークとして大いに高く評価されるべきであろう。

さてラタナコーシン史研究者がまずよるべき「正史」といえば、Chaophraya Thiphakorawong の *Phra-ratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin* を挙げるべきであろう(この年代記については『東南アジア研究』第2巻第2号所収拙稿参照)。上記の Vella もこれを縦横に引用している。本書はこれまで意外な程利用されることのすくなかったこの貴重な年代記の内、「ラーマ4世」の部の前半の完訳である。何はともあれ、本邦はおろか世界初訳という業績が、わが国の研究機関の手で生み出されたことを喜びたい。と同時にこの困難な企画をとりあげ、これを完成へと導いた東アジア文化センター関係者の識見と努力とに対し、心からなる敬意を表すものである。

本訳書は、「ラーマ4世年代記」のうち仏歴2404年(1861)、Yinyaowalak 内親王の前髪を断つ儀式の記事までを含み、原著の約半分(245ページまで)に相当する。固有名詞のローマ字表記は Mary Haas 式の音素記号をもって行なわれ、声調まで厳密に表記し分けている。

この種の文献の翻訳につきまとう困難のひとつは、政府機関ないし役職名に対する訳語選択の問題である。本訳者は原語直訳主義をとり、どうしても適当な訳語の見出せないときは、原語をそのまま残すという

慎重な態度をとっている。タイ語の昔の官庁名または役職名には名称と機能の一致しないものがまま見受けられるので、この訳本のみをたよりとする一般読者にとって、直訳主義はあるいは misleading となるおそれなしとしないが、この点は、続刊予定の第3巻:註解の中で解決されるものと信ずる。

訳者はタイ人で、チュラロンコン大学文学部を首席で卒業後、ワシントン大学に学び、東南アジア史を専攻して修士号を獲た新進の歴史学徒であるが、本訳書の完成には、タイ語と共に、日本語、中国語をよくする歴史学者の夫君(米人)の協力があずかって力あったと聞いている。全3巻の完成を心より期待したい。

(石井米雄)

Thawi Mukthorakosa. *Phramaha Thiraratchachao.* Bangkok: Phrae Phitthaya, 1963. ix+844p.

タイ国近代史のなかにプラモンクットクラウ王、すなわちラーマ6世をどう位置づけるかは、政治史学者にとって焦眉の課題となっている。たとえば1932年の立憲革命の素因のおおかたは、ラーマ6世の統治のなかに求められねばならない。とにかく、毀誉褒貶の激しい人物で、従来、この国王の評価は、タイ国内外で、はっきり2つにわかれている。

そのわりに、ラーマ6世の統治についての実証的研究は、殆んどなされず、その御代に生じた事柄を明確にしかもまんべんなく捉えることは、これまでかなり困難であった。国王の特に後半世における「乱行」が世に知られることを怖れてか、ラーマ6世についての一次資料の一部は公開されないともいわれている。それに、国王の統治した時代がまだあまりに近すぎるこある。それらの理由から、ラーマ6世の研究は、ある種の困難さに伴われているのだ。

本書は、そのラーマ6世に真っ向から取り組んだすぐれた伝記である。ラーマ6世に関する基礎文献をひととおりおさえ、それをさらに、同時代に生きた人々の面接で補っている点、きわめて実証的である。その点で、本書は、あまたのメリットをもっている。なによりも感心することは、ラーマ6世の一生が、きわめて淡々と、しかも広く詳しくカバーされている点である。著者が、そもそものアプローチにおいて、ラー

マ6世を多面的な人間と捉え、王の多面性を疎漏なく捉えようと努力したことが、幸いしているように思われる。更に本書は、当時生じたいくつかの重要な歴史的な事象を明確に解き明かしている点で、貴重な文献になっている。タイの王朝で、はじめて外国留学の経験をもった国王であり、しかもその留学期における王の socialization が、タイ政治史の上で一つの重要な転変の契機となっているだけに、本書の冒頭の留学についての叙述は、たいへん参考になる。そのほか、1912年に生じたいわゆる「ラタナコーシン歴130年の革命」についての記述は、その革命が、たとえ失敗したとはいえ、タイの絶対王制にたいする近代官僚の最初の革命的反逆であっただけに、貴重なデータを提供してくれているし、また有名な「スアパー義勇隊」について、国王がどういう考えをもっていたかも、本書でよく示されている。

ラーマ6世にたいする著者の態度は、タイトル——「哲人王」を意味する——が示すようにたいへん好意的である。ラーマ6世の御代は、本書においては、チャクリ王朝史の黄金時代と捉えられている。ラーマ6世が犯したさまざまな失政は、本書ではかならずしもはっきりしない。その点は、Chula Chakrabongs らの英語文献、あるいは Thai Noi らによるタイ語の伝記によって補足する必要があるだろう。それにも拘らず、本書は、現段階におけるラーマ6世の研究としては、最先端を切るものであり、内容の水準も高度であるからには、見逃せない一書であると断じうる。巻末にまとめられた参考文献目録は有益だし、そして、本書は、巻末に索引を備えている点で、タイの本としては、稀有の範疇に属するといえる。（矢野 暢）

Chalao Chaiyaratana. *Let's Speak Thai*. Bangkok: The Social Science Association Press of Thailand, 1965. 188p.

本書は、タイ人の言語学者によって書かれた、外国人（主として英語を母国語とする）のための、タイ語入門書である。題名から察せられる様に、実用一点ばりの練習用の書物であるが、その基礎は、現代アメリカの構造言語学にもとづいて作られた、まじめな本である。タイ語について、タイ人の言語学者によって書かれた実用的な練習用の本では、本書が最初のもので

はないかと思う。

著者は、MIT において Applied Linguistics で Ph. D. を取り、現在タマサート大学教養学部言語学科の Head をつとめると同時に、自身の Chalao Language Institute においても、活ばつに言語教育を進めている。タイ国における、この分野での代表的人物と言えるだろう。本書の他にも、タイ人のための英語のテキスト類やレコードなど、数多く出版している。タマサート大学では、英語、フランス語、ドイツ語、中国語、日本語が教えられているが、どの授業も著者流の Intensive Method でつらぬかれている様である。

本書の全部が文型及び句構造の練習より成る。全体で32の文型を設定し、その各々を一つの Chapter として多数の例をあげて練習に供すると同時に、句構造として、Noun Phrases と Verb Phrases とを説明し、その各々の型につき練習用の例をあげる。これらの文型及び句構造を一見すると、本書は Transformational Analysis の理論を基礎としていることがわかる。Noam Chomsky を中心としてアメリカで展開された Transformation の理論は、色々な面でその有用性を発揮しているが、これはその理論がタイ語に応用された好例であろう。なお、本書では、タイ文字はいっさい使用せず、すべてローマ字による音素表記が用いられており、根本的には Mary Haas の *Spoken Thai* の表記法と同じものとみてよい。

本書は、もともと、教室で使用する Text として作られたもので、独習用のものではないから、別にこん切ていねいな説明というものはない。したがって、本書でタイ語を学習する際には、少くとも最初の一定期間は、適当なタイ人について勉強する必要があるだろう。ただ、最初のコツを得てしまえば、あとは何も考えずに自分でどんどん進むことが出来るだろう。本書を完全に仕上げれば、一応の Speaking には不自由しないと思う。最後に、問題に思う点は、これを Text に使用した場合、習う方の者に相当な忍耐力がなければ、最後まで続かずに落伍する者が多く出るのではないかと言うことである。全体が文型という文法的な Pattern のみにもとづいて配列されているため、各文の内容の間には何のつながりもなく、ただ同じ Pattern に属する多くの文を次々と練習して行くのであるから、どうしても、「アキが来る」きらいがあるだろう。私は、むしろ、本書は教師用の整理ノートの様なものと

して使用し、実際に教室で使用するには、もう少し形
のちがった、内容的にも興味を持てるものにした方が
よいと思う。あるいは、*Spoken Thai* などで一応基礎
的なタイ語をやった者が整理のために本書を使用する
のなら、大いに有用であろう。なお、かなり誤植が多
く、急いで製本した様な印象を受ける。(桂満希郎)

David D. Thomas et al. *Mon-Khmer
Studies I*. Saigon: 1964. 163p.

Linguistic Circle of Saigon といっても一般には知
られていないが、本書によると、南ベトナムの Saigon
大学と米国の Summer Institute of Linguistics のメ
ンバーによる研究会であるらしい。本書は、その研究
会が1963年秋にユエ (Hue) で行なわれた際に読まれ
た原稿をまとめた論文集である。著者は、編者として
Introduction を書いている米国 North Dakota 大学の
David D. Thomas を除いては、John and Elizabeth
Banker, John and Carolyn Miller, Richard and
Saundra Watson というこれまでほとんど無名であっ
た人たちがばかりである。

本書で扱われている言語は、南ベトナムで話されて
いる3つの少数民族の言語、すなわち Bahnar 語、
Brou 語、Pacoh 語であって、いずれも東部モンクメ
ル系統に属する。この系統の言語は、ラオス、ベトナム、
カンボジアに様々な種類が分布しており、比較言
語学的にクメル語を考えるうえで欠かせないものであ
るにもかかわらず、事実上ほとんど未開拓のままであ
った。その意味で本書の出現はまことに喜ばしいこと
に違いない。ことに、このうちの Brou 語と Pacoh 語
は今まで単にその名が知られていただけであった。

もっとも本書からはこれら3つの言語の断片しかわ
からない。各論文とも記述的な研究であるが、短い論
文であるうえ、取上げた問題も方法も異なっていて、全
体としてひとつの言語の構造がわかるという体裁のも
のではないからである。すなわち、Bahnar 語につい
ては、(1) Clause Paradigm, (2) Affixation, (3) Re-
duplication, Brou 語については、(1) Word Classes,
(2) Substantive Phrase, Pacoh 語については、(1)
Pronouns, (2) Phonemes が、それぞれ述べられている。

本書の主眼とする所はむしろ様々な記述方法の適用

例の提示ということにあるようである。たとえば、
Bahnar 語の Clause Paradigm には transformational
battery が、Brou 語の Substantive Phrase には
tagmemic approach が用いられるという具合に。し
かしこの場合、battery とか tagmemic, tagmatic と
かいった術語に対して、十分な説明や定義がほしいも
のである。これらはまだあまり熟していなかったり、
学者によって用法が同じでないものだからである。

比較言語学的な論文としては Thomas によるモン・
クメル語比較研究の展望があるのみであるが、まさに
その中で述べられているように、この系統の言語の比
較研究を困難にしている最大の原因は音素論的基礎の
欠如である。それは本書の対象となっている言語につ
いてもあてはまることである。

ともあれ、Schmidt より半世紀以上もたった今日よ
うやく、しかしここ数年来にわかに、モン・クメル語
の研究が活発になったことは事実であって、本書も
またそのひとつの現われなのであろう。(三谷恭之)

Udom Warotamasikkhadit. *Thai Syntax:
An Outline*. A Dissertation Presented to the
Faculty of the Graduate School of the
University of Texas. Bangkok: College of
Education Prasarnmitr, 1963. v+70p.

タイ人によって書かれたタイ語に関する本というの
は、一口に言えば、いかにして正しいタイ語を使用す
るかという規範的なものがほとんどであった。しか
し、最近になって、タイ人の若い学者で、主としてア
メリカの記述言語学の方法を身につけ、それでもって
タイ語を記述説明して行こうという人達が出て来てい
る。本書はその代表的なものといえるであろう。した
がって、本書はタイ語の規範を示すものでもないし、
これでもってタイ語を勉強しようとしても全く無駄で
あろう。言いかえれば、「いかにタイ語を使用すべき
か?」ということは一応別にして、「タイ語とはどう
いう構造の言語か?」ということを明らかにしようと
するものである。

アメリカの構造言語学においても、従来の方法では
説明し切れなかった多くの点を説明することのできる
新しい言語理論として現れたのが Noam Chomsky,
Emmon Back 等を中心とする Transformation の

理論であるが、本書はこの理論に基づいてタイ語の Syntax を記述するものである。全体を Phrase structure, Generalized grammatical transformation, Optional grammatical transformation, Obligatory grammatical transformation に分けて説明しているけれども、これらはすべて置きかえのルールより成り、最後まで読み通してはじめて、タイ語の Syntax 構造が明らかになると言った性格の本である。頁数も余り多くなく、複雑な Syntax 構造を非常に簡潔に要領よく記述していると言えるが、Transformational analysis の理論について予備知識を持ったうえで読まなければ、とても理解できないのではないかと思う。

もちろん、私は本書が完全なものだとは思わないし、むしろキメが荒いと思うくらいであるが、タイ人の手によってこう言った研究がなされていると言うことは、喜ばしいことであると同時に、我々外国の研究者にとっては、驚異に値することだと思ふ。とにかく、タイ人はタイ語がわかるのであるから、彼らが本腰を入れてこういう研究を始めたら、とても太刀打ちできなくなるのではないかと思われる。Transformation の理論自体が、未だ完成したものとは言えないけれども、色々な面で大きな成果を上げていることは事実である。最近、外国の研究者に対するタイ語教授、あるいはタイ人に対する英語教授等の必要が大きくなりつつあるが、こういった実用的な面での効果をあげるためにも、本書の様な基礎的な研究が必要であると私は思う。先にも述べた様に、本書が完べきなものだというつもりはないが、こういった研究が地道に続けられ、つねに補正されて行くということは、タイ語研究にとって喜ぶべきことだと思ふ。(桂満希郎)

Thawit Suphaphon. *Prawatsat Thai-Khom-Khamen*. Bangkok: 1965. 832p.

タイ国の歴史に関する書籍は数多く出版されているが、それらの中で本書は、タイ族、コーム族、クメール族と3つの民族の相互関係に焦点をしばって書かれているという点で特色を出したものである。他の歴史関係の本と同じ様に、歴代の王朝を追って説明して行くわけであるが、上記の3民族の関係ということの中

心としており、その他の余り関係のない事柄は切りすてるなり、ごく簡単にふれるにとどめるなりして、かなり問題点のはっきりした書物となっている。一方、中心問題に関係ある事柄については詳しく述べているので、相当な大冊となっている。

まず全体を、Ayuthaya 王朝以前とそれ以後とに大別する。前者においては、タイ族が中国より南下する以前の状態について略述し、ついで Sukhothai 王朝に至るまでの3民族の交渉について順を追って説明する。後者においては、Ayuthaya 王朝、Dhonburi 王朝、Ratanakosin 王朝、フランスのカンボジア統治という順序で、3民族の相互関係を説明している。タイ族の南下より近代に至るまでの3民族の交渉史概説とも呼ぶべきものであろう。駆使している資料も相当な量にのぼっている。クメール族、タイ族というのは一応誰でも知っている民族であるが、コームというのはクメール族と同じもの、あるいは極めて近い関係にある同系統の民族といわれており、タイ族がタイ国に入って来る以前にすでにその地域一帯に居住していたと考えられている。私は歴史について云々する資格はないので、ただ本書でこれらの民族について書かれていることを紹介するに止める。本書によると、コームがタイ族以前から住んでいたクメール系の1民族であるに対して、現在のクメール族(カンボジア人)は、コームと同じものではなくて、タイ族の勢力が広まるにつれて、その地区に住んでいたコーム族との間に出来た民族だとする。私は別にこの考えに賛成も反対もするつもりはないけれども、本書がこういった考えの上に立って、これら3つの民族の関係、交渉について書かれているので、紹介するまでである。もちろん、タイ人によって書かれたものであるから、タイ国あるいはタイ族に最も多くの比重が置かれているが、原則としては、インドシナ全体を捕えて書かれたもので、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナム等を全体として扱っている。本書が学問的にどれだけの価値があるか、あるいはどの程度の水準のものであるかは、私には何とも判定する資格はないが、歴史の本として、少くとも、読んで楽しいものであることはまちがいない。

(桂満希郎)